

(TIME - July 28 2025 (発売日 2025 年 07 月 20 日) 和訳)

建設の基盤を支える力

機械メーカーの東陽建設工機は、建設業界の効率化を推進し、大阪から世界へと広がる「鉄筋革命」を牽引している。



環太平洋火山帯という地震の多い地理に位置し、自然の猛威を幾度も経験してきた日本の建設業界は、世界でも最も厳格な品質基準のもと、迅速に進化を遂げてきた。強靱で柔軟な構造を実現するための工夫が、建築の根本に組み込まれている。

鉄筋は、1900 年代初頭から日本の建築において構造強度と柔軟性を提供してきた。琵琶湖近くの日ノ岡橋は、その初期の活用例のひとつである。1980 年代までは、鉄筋の約 8 割が建設現場で加工されていたが、現在では 95%が工場などの現場外で加工されている。この大きな変化を支えているのが、国内シェア 90%超を誇る東陽建設工機である。

同社の機械は、現場での作業効率を大きく高め、限られたスペースの有効活用も可能にしている。田中康雄社長は「現場で鉄筋加工が終わるのを待つ必要がなくなり、職人の方々がそれぞれの工程に集中できるようになります」と語る。また、工場加工により材料のムダも減り、「平均で 10%あったロスが、1%程度に抑えられることもあり、現場全体で見れば大きなコスト削減になります」と話す。

現在、東陽建設工機はこの効率的な加工モデルを、成長著しい海外市場にも積極的に展開している。「誰もが安心して暮らせる建物やインフラを利用できるようにしたい」という思いが、その原動力だ。台湾、韓国、東南アジア諸国での導入が進む中、現在はインドなど、より遠方の市場への進出を本格化させている。

「これらの国でも日本と同様、現場加工から工場加工への移行が進むと見ています。労働コストの上昇や安全意識の高まりとともに、当社のような高品質な機械の需要が急速に拡大すると予想しています。そのための先行投資もすでに進めています。」と田中社長は語る。